

特集

建築のまちを旅する 10

# 高松

「ところ」の素材と

人を生かした

山本忠司の建築





## 表紙の写真

### 〈瀬戸内海歴史民俗資料館〉外観

設計 | 山本忠司

高松市郊外の五色台に立つ博物館。外壁は、敷地を掘り起こして出てきた大量の石を積んでいて、岩盤から生えてきたように力強い姿だ。石積みは、イサム・ノグチの右腕だった石工であり石彫家の和泉正敏氏が手がけた。階段は屋上展望台へと続くもので、展望台からは瀬戸内海の絶景を見渡すことができる。設計者の山本忠司はこの建物で、自治体所属の建築技師としては初めて日本建築学会賞〈作品〉を受賞した

[写真:石田 篤]

## 左写真

### 〈イズミ家〉内観

設計 | 山本忠司

和泉正敏氏の自宅は、同氏が「ところの石」と呼ぶ香川名産の庵治石を積んでつくられた。和室の壁も石積みだ。床の間の壁の中央には苔が自然にむしてきたという。床の間は1枚の石で、上に置かれた小さな白い石膏は、ノグチの彫刻作品「エナジー・ヴォイド」の模型。実物は高松牟礼のイサム・ノグチ庭園美術館にある。世界的に知られるノグチが高松牟礼で彫刻制作に励むことができるように取り計らったのは、当時の香川県知事・金子正則と山本だった

[写真:石田 篤]

LIXIL eye no.22  
2020年6月20日発行

発行 | 株式会社LIXIL  
編集発行人 | 早川氏幸  
開発営業本部  
TH統括部  
〒136-8535  
東京都江東区大島2-1-1  
Tel: 03-6837-1646  
Fax: 03-6837-1662  
制作 | 株式会社フリックスタジオ  
デザイン | 株式会社ラボラトリーズ  
印刷 | 竹田印刷株式会社

\* 本記事の無断転載を禁じます

\* 本文中の敬称は省略させていただきました

次号『LIXIL eye』no.23は、  
2020年10月発行予定です。

『LIXIL eye』のバックナンバーは  
インターネットでご覧いただけます。  
<http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/>

## CONTENTS

### 特集

#### 04 建築のまちを旅する | 10

## 高松

#### 06 テーマ1

### 「ところ」の素材と人を生かした 山本忠司の建築

ナビゲーター | 中條亜希子

#### 10 喫茶「城の眼」/ 香川県立武道館/ イズミ家/ 瀬戸内海歴史民俗資料館

#### 14 テーマ2

### ジョージ・ナカシマも称賛した 讃岐民具連と木工の技術

#### 16 高松建築めぐり

#### 22 住宅クロスレビュー | 10

### 木質材料

山代 悟「西ヶ原の家」× 原田真宏「立山の家」

#### 32 建築家の〈遺作〉 | 07

### 吉村順三「高松郊外の家」

談 | 平尾 寛

#### 36 新世代・事務所訪問 | 10

### 能作文徳建築設計事務所

ナビゲーター | 門脇耕三

#### 44 構造家の新発想 | 10

無理をさせずに木を使う

### 榎田洋子

#### 48 触覚デザイン | 07

### 槇文彦の手すり

ナビゲーター | 笠原一人

#### 52 土木のランドスケープ | 10

### 太田川大橋

ナビゲーター・文 | 八馬 智

#### 58 Design + Technique

東京建物Brillia HALL

#### 62 TOPICS

オルタナティブ・トイレの可能性

文 | 石原雄太

#### 65 INFORMATION

LIXILからのご案内/ 展覧会+イベント/ LIXIL出版 書籍案内

#### 68 紙上の建築 | 10

コンタクト・ユニバース グリーゼドーム

### 鳴川 肇

高松は一度は訪れたい建築のまち。まずは丹下健三の代表作・香川県庁舎をはじめ、芦原義信、大江宏、浅田孝など著名建築家の傑作が点在する、近代遺産の宝庫である。なぜそれほど多彩な建築家が集まったのか。鍵を握るのは、1人の知事と1人の香川県建築技師。

2人を含めたこの地の有志が、建築を盛り立て、建築家をつないできたのだ。

技師の名は山本忠司。本人も重要な建築を残している。

一方、元来この地は良質な花崗岩の産地。なかでも庵治石は石碑、墓石として全国に知られるほど。

石は戦後になって、アーティストや建築関係者に注目され、その用途を広げてゆく。

これもまた建築のまちを醸成する原動力だ。建築とともに、アートやデザインにも注目したいまちだ。

# 高松

特集 建築のまちを旅する 10

この五色台の地から掘り出された「とさの石」を外壁に積んだ「瀬戸内海歴史民俗資料館」。大小の島々が浮かぶ瀬戸内海を望む景色に溶け込む。香川県の建築技師として設計を手がけた山本忠司は、風土に根ざし、地域を育む建築を追求していた【写真：石田 寛】

## テーマ1

# 「ところ」の素材と人を生かした 山本忠司の建築

ナビゲーター | 中條亜希子 (高松市歴史資料館学芸員)

取材・文 | 長井美暁  
写真 | 石田 篤 (特記以外)



## 山本忠司

やまもと・ただし

1923 (大正12)年、香川県大川郡に生まれる。京都工業専門学校 (現・京都工芸繊維大学) 建築学科を卒業後、香川県に建築技師として入庁。「瀬戸内海歴史民俗資料館」で日本建築学賞 (作品) を受賞。1998年に逝去。略歴は09ページ参照  
[写真提供: 高松市歴史資料館]

### 01 | 丹下健三

建築家 (1913-2005)。「香川県立体育館」は1964年に竣工

### 02 | 芦原義信

建築家 (1918-2003)。「香川県立図書館」は1963年に竣工

### 03 | 大江 宏

建築家 (1913-1989)。「香川県文化会館」は1965年、「香川県立丸亀武道館」は1973年に竣工

### 04 | 大高正人

建築家、都市計画家 (1923-2010)。「坂出人土地」は1968年に竣工

### 06 | 猪熊弦一郎

高松市生まれ、丸亀市育ちで、国際的に活躍した画家 (1902-1993)。「香川県庁舎」で陶板壁画《和歌清寂》を見ることができ

山本忠司のように、自治体の建築技師が後世に建築家としても評価されるのは珍しい。全国的に見ても大規模な営繕組織だった香川県の建築課を率いて、高松をはじめ県内の公共施設の建設計画を進めたほか、自ら設計を手がけた「瀬戸内海歴史民俗資料館」では自治体職員として初めて日本建築学会賞 (作品) を受賞。公共施設以外の仕事にも取り組み、イサム・ノグチのアトリエや住まいの建設などにかかわった。

風土に根ざし、地域を育む建築を追求した山本。その境地に至るまでには、さまざまな人や建築との出会いがあった。どんな出会いがあったのか。高松市歴史資料館学芸員の中條亜希子氏の案内で、高松の山本建築を訪ねた。

丹下健三<sup>01</sup>が設計を手がけた「香川県庁舎 (東館)」の耐震改修工事が2019 (令和元)年12月に完了した。1958 (昭和33)年に竣工したこの建物は、丹下の初期の傑作として知られる。

丹下は高松に「香川県立体育館」も残している。高松にはまた、芦原義信<sup>02</sup>が設計した「香川県立図書館 (現・香川国際交流会館)」、大江宏<sup>03</sup>の「香川県文化会館」、浅田孝の「五色台山の家 (現・五色台少年自然センター研修棟)」がある。範囲を県内に広げれば、大江の「香川県立丸亀武道館 (現・香川県立丸亀高等学校武道館)」、大高正人<sup>04</sup>の「坂出人土地」などもある。

これらの建設に共通して関係する人物が、“建築知事”“デザイン知事”の異名をもつ金子正則<sup>05</sup>と、県の建築技師だった山本忠司だ。

## 戦後復興を担う建築技師として

山本は1923 (大正12)年、香川県大川郡志度町 (現・さぬき市志度) に生まれた。京都高等工芸学校 (現・京都工芸繊維大学) 図案科に入学した1943 (昭和18)年12月に徴兵され、高松で敗戦を迎えた。そして戦後、改組された京都工業専門学校建築科に復学し、1948 (昭和23)年に卒業。香川県に入庁し、建築技師として働きはじめた。

金子はその前年、副知事に就任していた。丸亀のうちわ職人の家に生まれ育った金子は、神童と呼ばれるほど勉学に秀でたが、家が裕福ではな

かったため、まちぐるみの援助を受けて東京帝国大学法学部に進学。卒業後は裁判官になった。そして戦後、40歳を前に郷里丸亀に戻り、弁護士として開業したところ、副知事に担ぎ出され、1950 (昭和25)年から6期24年にわたり、知事を務めた。

高松は終戦ひと月前の空襲によって市街地の約8割が焦土と化した。金子と山本がともに戦後復興に熱い思いを抱いていたであろうことは想像に難くない。金子はいくつかの構想を抱いて知事の職に就き、県庁舎の建設に際しては民主主義の時代にふさわしい建物であることや観光香川の象徴となる建物を望んだ。

ところで山本は、日本が戦後初めて参加した1952 (昭和27)年のヘルシンキ・オリンピックに陸上・三段跳の日本代表選手として出場している。187cmと長身で、強靱な精神と肉体をもつスポーツマンは、少年のころから走ることと絵を描くことは誰にも負けなかったという。帰国後すぐに設計した山本の1作目「屋島陸上競技場」は現存しないが、オリンピック会場だった彼の地のスタジアムに感化され、北欧デザインの影響が見られた。

## 民家調査や雑誌の執筆委員も

そののち山本は、金子の指揮の下に始まった県庁舎計画に携わる。県庁舎の建設は、まさに戦後復興の象徴となるものだった。山本は丹下に初めて模型を見せられたときに少なからずショックを受け

### 05 | 金子正則

丸亀市生まれの政治家、弁護士 (1907-1996)。建築やデザインへの深い造詣は、大学時代にブルーノ・タウトの著書『日本美の再発見』に心打たれたことに始まる。知事時代には「政治とはデザインなり」「建築は人間の生活そのもの」といった言葉を残した。右の写真にはいずれも、金子と山本が写る。(左)1966年ごろ、香川県保健衛生センターの建設現場で撮ったと思われる。右側のヘルメットを手に持つ人物が金子。(右)1950年代に県庁仮事務所の建築課で撮ったと思われる。左端が金子、中央の長身の人物が山本 [写真提供: 高松市歴史資料館]



た。「それは一見鳥籠のような建築であった。建築とは、柱を立て、壁をつくり、柱と壁とで構成されるものとの建築的概念があったが、その作品はそのようなわれわれの既成の考え方を完全にうち破るものであった。(中略)しかもその柱や梁によって組み立てられた鳥籠建築ははなはだ日本的な感覚をおぼえるものであった」とのちに述懐している。

金子に丹下を紹介したのは、旧制丸亀中学の2年先輩で、当時から国際的に活躍していた画家・猪熊弦一郎<sup>06</sup>だったという。中條亜希子氏は「猪熊さんは金子さんとだけ特別な間柄だったわけではありません。戦前から、どの知事も美術や工芸に関することは猪熊さんにまずアドバイスをもらっていました。猪熊さんは郷里を想う気持ちが強く、香川の応援団長のような人でした」と話す。「栗林公園内にあった高松美術館が山口文象<sup>07</sup>の設計だったのも、猪熊さんが友人の“文ちゃん”を紹介したからだそうです」。

金子は県庁舎の設計を丹下に依頼した際、条件のひとつに「資材はできる限り県内産のものを使うこと」という条件を示し、香川の素材や職人の技術を使うことを求めた。庭石や1階ロビーの受付机に用いられた庵治石、香川漆芸<sup>08</sup>の後藤塗が施されたホールの扉など、いまも見られる県庁舎の特徴的な意匠は、金子の意向を受けたものも多い。中條氏は「金子さんは県庁舎の仕事で高松に来るインテリアデザイナーの剣持勇さんや小林保治<sup>09</sup>さんを県の囑託職員として講師に迎え、ものづくり関連の中小企業を集めてデザイン指導してもらっていました。そのなかで最も熱心に取り組み、県庁舎をはじめ県施設の家具製作に携わるようになったのが桜製作所です」と語る。山本は県庁舎の建設を通して、建築界の最前線にいた丹下の仕事に学びながら、一方では地域への眼差しを獲得し、風土への関心を高めていった。

さらに、県庁舎が竣工した年、建築写真家の上野時生<sup>10</sup>が高松で『四国建築』という建築雑誌を創刊した。山本は執筆企画委員としてこの雑誌に参加。上野はその前から民家の研究調査を行い、山本以

外の3人の執筆企画委員も民家に高い関心を寄せていて、創刊の翌年には「四国の民家」という連載を開始。山本は上野との出会いによって、民家にも関心を向けるようになり、上野と一緒に県内の民家を訪ね歩いた。

このころ山本は30代半ば。1960年代から70年代半ばにかけて、香川は冒頭に挙げたような公共施設が日本を代表する建築家の設計によって次々につくられ、山本は担当職員として、やがて県の建築課を率いてそれらの建設にかかわった。1967 (昭和42)年には、「香川県の建築および都市開発のデザイン・ポリシーに対する香川県知事を中心とする建築関係者一同」として毎日芸術賞を受賞している。

一方で、「香川県立武道館」や「瀬戸内海歴史民俗資料館」といった自ら設計を手がける建物も生み出している。さらに、「喫茶 城の眼」やイサム・ノグチのアトリエと住まいなどの設計にも協力。そのうえで雑誌に寄稿したり民家調査で山奥に出向いたり、いくらスポーツマンとはいえ、驚くほどの気力体力だ。

「40代のころの父は家にいなかった、と山本さんのお父さんが話していました。いまとは違って、新しい建築が次々に建っていた時代で、金子知事の後押しもあり、寝る間を惜しんで仕事をしていたようです。中條氏はこう語る。



### 07 | 山口文象

建築家 (1902-1978)。「高松美術館」は1949年に竣工、現存せず

### 08 | 香川漆芸

江戸時代に高松藩主・松平家の保護・奨励のもとに発展。江戸後期に玉椿象谷 (たまかじ・そうこく) により蒔薨 (きんま)、彫漆、存清 (ぞんせい) の3技法が確立された。これらに加えて後藤塗、象谷塗の5技法が、国の伝統的工芸品に指定されている

### 09 | 小林保治

三業工業代表取締役、インテリアデザイナー (1908-1974)。香川県庁舎の内装設計に剣持勇を推薦し、自らも家具デザインを担当。谷口吉郎が設計したホテルオークラや東京會館などの家具もデザイン。天童木工の技師顧問も務め、丹下が設計した全国の建物に納める成形合板の椅子などを製作

### 10 | 上野時生

高松市生まれの建築写真家 (1931-)。工学院工業専門学校 (現・工学院大学) で建築を学び、卒業後は建築事務所勤務を経て、建材新聞の記者に転身。1954年に帰郷し、上野時生建築写真事務所を設立。1958年に『四国建築』を創刊

### 香川県立武道館

山本の設計により、1966年に竣工。エントランスのガラス壁面の下部は、香川県庁舎のそれに通じる納まり。関連10ページ



### イサム家、イサム・ノグチアトリエ作業蔵、展示蔵（イサム・ノグチ庭園美術館）

彫刻を中心に世界的に活躍した日系アメリカ人アーティストのイサム・ノグチ（1904-1988）は1969年から高松牟礼にアトリエと住居を構え、日本滞在の拠点とした。それが現在、イサム・ノグチ庭園美術館として公開されている。上段は武家屋敷を移築・改修した「イサム家」（1969）、下段右の右手がアトリエとして使われた「作業蔵」（1969）、左奥に「展示蔵」（1982）が立つ  
[左上をのぞく写真3点：© 2020 The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum/ARS, NY/JASPAR, Tokyo E3748] [写真4点の撮影協力：イサム・ノグチ庭園美術館]

### 11 | 流 政 之

国内外で活躍した美術家（1923-2018）。1966年に高松の庵治半島に住居兼スタジオを構え、晩年まで制作の場とした。現在は美術館として公開されている



イズミ家にて和泉正敏氏。和泉氏は1938年牟礼に生まれ、15歳から石の仕事を始めた。イサム・ノグチが亡くなったあと、石彫家としての活動を始め、その作品は台湾の国立故宫博物院などに置かれている。2004年からイサム・ノグチ日本財団理事長も務めている  
[写真：編集室]

## イサム・ノグチとのかかわり

「建築人生において最大の出会い」となった県庁舎建設を皮切りに、山本はさまざまな人との出会いやつながりのなかで、自身の建築の土壌を育んだ。世界的なアーティストであるイサム・ノグチとの出会いも山本に大きな影響を与えた。

ノグチが初めて高松を訪れたのは1957（昭和32）年。ノグチはパリのユネスコ本部日本庭園に用いる石を求めて作庭家の重森三玲と徳島に出かける前、猪熊の紹介により金子を訪ね、知事公邸に泊まった。金子は翌日、小豆島に石を見に行くノグチに同行し、ついでにと庵治の石切り場に案内した。庵治の五剣山は日本三大石材産地のひとつで、ここで産出される庵治石は最高級の花崗岩だ。

庵治や隣町の牟礼には、庵治石を加工する石工が多く集まっている。金子はノグチがこれらの石産業に新たな息吹をもたらしてくれる可能性に期待して、彼を知事公邸に泊めた。庵治石は石質の良さで知られていたが、従来の墓石づくりだけでは将来が思いやられたからだ。

しかし金子の期待に反して、ノグチからは何の音沙汰もなかった。その間に新鋭美術家の流政之<sup>11</sup>が取材のために高松を訪れた（関連14ページ）。金子は流を、庵治で一番手広く事業を展開していた岡田石材工業に紹介。流はそこを仕事場に、町おこしにつながる制作に専念した。また、地元の若い石工を育成する「石匠塾」をつくり、彼らを率いてニューヨーク世界博覧会日本館（前川國男の設計）の外壁の石彫レリーフを制作して評判になった。

そのころにノグチが、日本での制作拠点を求めて再び金子を訪ねて来た。庵治石の現場にはすでに流が落ち着いていたが、金子は「同地の石産業をさらに刺激し、緊張感をおおるのに願ってもない」とノグチを歓迎し、当時建築課長補佐だった山本を引き合わせ、ノグチの右腕になりそうな石工を見つけるように指示した。

山本はすぐに和泉正敏氏の顔を思い浮かべた。和泉氏は牟礼の石材加工業者を代表する和泉屋石材店の三男で、1964（昭和39）年、25歳のときに、石壁や庭、石彫を扱う「石のアトリエ」を構えた。県庁舎での石の扱われ方を見て石の可能性を感じ、石の新しい分野への取組みを始めよう仲間と立ち上げたものだった。山本はノグチを、看板をあげて間もないこの「石のアトリエ」に案内した。

ノグチが必要としたのは、日本の伝統的な石の扱い方にとらわれず、彼が頭のなかで描き求めるように石を形づくる技巧と感性をもつ石工だった。山本は以前、庵治で設計を手がけた建物と庭園の仕事で、石材の造作のために現場に入っていた和泉氏と出会っていた。

## インドで見出した建築の意義

和泉氏は山本と初めて会ったそのときのことを「すごく気持ちよく指導してくれました。若い人を育てるのが好きだったのでしょ」と振り返る。「山本さんは石をただ素材として見るのではなく、石の命のようなのを見つける人。石を大事にして、生かし方をわきまえていました」。

金子と山本の全面的なバックアップにより、ノグチは和泉氏という献身的で真摯な協力者を得て、牟礼を日本での制作拠点とすることにした。そして現在の「イサム・ノグチ庭園美術館」の敷地内にアトリエと住まいを構えることになり、それらも山本が手はずを整えた。丸亀の古い武家屋敷を移築して手を加えた住まい「イサム家」は、ノグチは当初、住むのを

嫌がっていたが、山本の熱心な説明に次第に興味を示し、やがて食事の時間も割いて綿密に打ち合わせを行うようになったという。

同じところにアトリエ外周の円形石積みも出来上がった。アトリエと住まいは現在、「イサム・ノグチ庭園美術館」として公開されている。

和泉氏は「ノグチ先生が来るまで、香川では建築に石を積むということがほとんどありませんでした」と語る。山本の代表作「瀬戸内海歴史民俗資料館」で印象的な石積みの外壁も、山本とノグチの交流がなければ生まれなかった。

山本は同館竣工の前年、ノグチや和泉氏とともにインドを旅した。そして建設中の「インド経営大学<sup>12</sup>」（ルイス・カーンの設計）の現場で大きな衝撃を受けた。「目の前に現れたその建築は、総てを煉瓦でつくっていた。そのあたりにある土を焼いて煉瓦をつくり、インドの器用な手先で“道具もの”の煉瓦を形づくることも現場の一角でやっている。サーリを着た若い娘さん達が煉瓦を何枚か重ねては頭の上に乘せて運んで行く、皆が喜んで働いている。しかもその地域の材料を使っているためその建築は、完全にその地に根を下ろしている。うわついていない。どっかとそこに腰を据えているのである」と綴る。

山本は「その土地の材料を使って、多くの人達が喜んでつくった建築ということに大きな意義を見出し」、帰路の香港のホテルで、それまでの設計案を一転させ、実現案の骨格を一晩で描き上げた。

「ノグチ先生も山本さんも、“ところ”の良いものを大事にするのが好きでしたね。“ところ”は「その地域」の意味だ。和泉氏は同館の石積み壁を手がけた。山本との仕事で一番思い出に残っているという。「五色台<sup>13</sup>」の現地の地盤はすべて岩盤で、基礎を掘るときから石が大量に出てきて、これは建築に使え

るかと思われました。五色台の石は安山岩質の非常に硬質な石だ。現場で掘削された石は外壁に積むことになり、和泉氏は気が遠くなるくらい大量の石を大小に分けて丁寧に保管し、1個ずつ積み重ねていって、あの壁が出来上がった。山本はのちに「歴史民俗資料館での石の使用は、いわば20年来の総決算であったような気がする」と振り返っている。

和泉氏が自邸「イズミ家」を建てたのは、山本が背中を押したことがきっかけだった。「私は自分の住む家のことなど全然考えていなかったのですが、イサム家が終わったころ、山本さんに「次は和泉家を建てたらどうか」と言われました。土地は近くにあったので、石を積んで自分でつくることを決めて、山本さんに設計をお願いして、いろいろと教えていただきました。和泉氏の顔が和らぐ。「山本さんは戦死した長兄と同年なんです。兄のようにいろいろなことを教えてくれ、かわいがってくれました」。

中條氏は「山本さんが人とモノをつないで生まれた建物は香川の財産になっています」と話す。山本は1979（昭和54）年、「瀬戸内海建築憲章<sup>14</sup>」を起草。1981（昭和56）年に県庁を退職後、香川県職業訓練短期大学校長を経て、自身の建築事務所を開設した。最後の仕事は1998（平成10）年、直島町の古民家を改修し、現代アートの作家が空間そのものを作品とする「直島・家プロジェクト」の第1弾として発表された「角屋」だ。山本は築約200年の家屋の修復監修を手がけ、完成を見届けたのち、同年7月に逝去した。

この家プロジェクトが瀬戸内国際芸術祭に発展した。「山本さんはその種を蒔いたのです」と中條氏。2000年以降、直島や豊島など瀬戸内海に浮かぶ香川の島々に現代日本を代表する建築家たちの名建築が次々につくられ、香川は全国随一の「建築王国」となった。その礎を築いたのは山本だったのだ。

山本忠司 略年表			
1923（大正12）年	香川県大川郡志度町（現・さぬき市志度）に生まれる	1948（昭和23）年	京都工業専門学校（現・京都工業繊維大学）建築学科を卒業。香川県に入庁
1952（昭和27）年	ヘルシンキ・オリンピック出場（陸上・三段跳14位）	1953（昭和28）年	「屋島陸上競技場」竣工
1955（昭和30）年	「香川県庁舎」着工。設計段階から建設にかかわる	1956（昭和31）年	「讃岐民芸館新市民芸館」竣工
1962（昭和37）年	「喫茶 城の眼」竣工。坂出人	1966（昭和41）年	「香川県立武道館」竣工
		1967（昭和42）年	「讃岐民芸館」竣工
		1969（昭和44）年	「イサム・ノグチアトリエ作業蔵」（設計協力）「イサム家」（設計協力）「香川県農業試験場農業展示館」竣工
		1970（昭和45）年	「讃岐民芸館瓦館」竣工
		1972（昭和47）年	「イサム・ノグチ、和泉正敏とともにインドを訪問。「イズミ家」竣工
		1973（昭和48）年	「瀬戸内海歴史民俗資料館」竣工
		1975（昭和50）年	「観音寺市立豊浜小学校・幼稚園」竣工。「瀬戸内海歴史民俗資料館」で日本建築学会賞〈作品〉を受賞
		1976（昭和51）年	「県営住宅宇多津団地」竣工
		1978（昭和53）年	「香川県立高松西高等学校」「まいまい亭」竣工
		1979（昭和54）年	「瀬戸内海建築憲章」起草
		1981（昭和56）年	香川県庁を退職。香川県職業訓練短期大学校長に就任
		1982（昭和57）年	「イサム・ノグチアトリエ展示蔵」（設計協力）「空海記念碑」竣工
		1985（昭和60）年	山本忠司建築事務所を開設（2年後、山本忠司建築総合研究室に改組）
		1988（昭和63）年	「イサム・ノグチアトリエ作業蔵」（設計協力）「瀬戸大橋記念館」竣工
		1991（平成3）年	「さぬき市野外音楽広場テアロン」竣工
		1998（平成10）年	「角屋（直島・家プロジェクト）」完成。7月、74歳で逝去



中條亜希子氏は高松に住んで約15年。「地元の人にとっては当たり前なのが高松独自の良さだとわかるのは、余所から来たからだと思います」と話す。地元の人が気がつかない金子知事時代のデザインや家具などに価値を見出す活動を行っている。そのデザイン資料の一部は現在、高松市歴史資料館に保管されている [写真：編集室]

### 12 | インド経営大学

インドの国立の高等教育機関で、13の分校がある。アーメダバード校はアメリカの建築家ルイス・カーン（1901-1974）が校舎を設計し、1974年に竣工

### 13 | 五色台

高松市と坂出市にまたがる小高い山。金子知事はここに、自然と芸術が融合した五色台観光ルートと、子どもたちを育成する場所をつくりたいと夢を描き、1962年に浅田孝が五色台開発計画を書き、それに沿って開発が進められた。しかし、金子が選挙に破れて知事職を去った後、計画は頓挫。「瀬戸内海歴史民俗資料館」と浅田が設計した「五色台山の家」以外の建物は解体が進む

### 14 | 瀬戸内海建築憲章

浦辺鏡太郎、村松正恒、神代雄一郎との親交を深めるなかで起草。冒頭には「瀬戸内海の環境を守り瀬戸内海を構成する地域での環境と人間とのかかわりを理解し媒介としての建築を大切にす」とある

### 中條亜希子 ちゅうじょう・あきこ

兵庫県生まれ。立命館大学文学部卒業後、情報通信会社やデザイン会社などを経て、2009年より高松市歴史資料館学芸員。「アート県」と呼ばれる以前から育まれてきた香川のデザインについて調査研究を行う。企画した展覧会に「心を豊かにするデザイン—讃岐民芸連とその時代—」（2016年）、「心を豊かにするデザイン—讃岐モダンへのあゆみ—」（2019年）など。

### 長井美暁 ながい・みあき

編集者、ライター／山形県出身。日本女子大学家政学部住居学科卒業後、「室内」編集部に所属。2006年よりフリーランス。

MAP 2

22

## 喫茶「城の眼」

1962年

設計 | 山本忠司

### 芸術家たちがつくり、集った 交流の場

店内の奥の石積み壁は、ニューヨーク世界博覧会の日本館（前川國男設計、1964）で彫刻家の流政之が担当した外壁の石彫レリーフの試作だ。香川県庁舎などの石工事を担当した岡田石材工業が石彫レリーフを制作することになり、その打ち合わせ場所としてつくり、その後、喫茶店になった。建物ファサードと室内のデザインは彫刻家の空（田中）充秋、店内で流す音楽は音楽評論家で作曲家の秋山邦晴、音響技術は電子音楽家の奥山重之助が担当。山本はこれらの芸術家たちの仕事を総合しながら建物を設計した。家具や壁にかかる瓦のランプシェード（讃岐民芸館瓦館では椅子の座面に使われている）なども山本のデザイン。また、入り口の傍に置かれた庵治石のスピーカー・ボックスは世界初のもので、これも必見・必聴だ。

- 1 高松市中心部の美術館通りに面して立つ。建物正面のプレキャストコンクリート版のデザインは、映画「ウエスト・サイド物語」に登場するニューヨークの街のグラフィックからヒントを得たものだという
- 2 店に入ると正面に、石積み壁がある。山本は出勤前に、小学校教員の妻と一緒に店に寄り、店内を見渡せる入り口付近の席でコーヒーを飲むのが習慣だった



MAP 2

23

## 香川県立武道館

1966年

設計 | 山本忠司

### 日本的な表現へのひとつの回答

鉄筋コンクリート造2階建て。柱梁を外壁に露出させ、木造建築のように見せている。屋根は浅い傾斜の切妻屋根を十字形に重ねた巨大なものだが、軒先は薄くデザインし、棟飾りも取り付けなど繊細さもある。

内部は1階に事務室や更衣室、2階に柔道場と剣道場を収めている。のちに1階に弓道場が増築された。

山本は香川県庁舎（1958）の建設に県の建築技師としてかわり、日本の伝統を踏まえた意匠と最先端の近代技術を融合した表現を丹下健三から学んだ。そして1960年代前半にその学習成果を次々に発表した。模倣・学習を繰り返す山本の脳裏には「なんとかしてそれをふっ切ろう、縁を絶とうという意識が絶えずあった」という。この建物にはそのような山本の葛藤も、実は刻み込まれている。

- 1 外観1階の柱は台形で、大きな梁が桁を組むようにデザインされた姿は、丹下が設計した「倉敷市庁舎（現・倉敷市立美術館）」（1960）に似たところがある。丹下が設計し、山本が建設にかかわった「香川県立体育館」（1964）が、この武道館のすぐ近くに立つ
- 2 内部の2階には巨大な屋根を支える梁が力強く現れている



## イズミ家

1972年

設計 | 山本忠司

### 「ところの石」を積み上げた和泉邸

イサム・ノグチの片腕として、日本での制作活動を支え続けた和泉正敏氏の自邸。1階の壁は和泉氏が、「ところの石」である地元の庵治石を空間ごとに選び、2年の歳月をかけて自ら積み上げた。最後に石の隙間にコンクリートを流し込んで固めている。その上に天井とスラブを兼ねたスペース・フレームがのり、さらにその上に木造の民家風の建物がのるという構成だ。トラスの赤と天井の白の配色はイサム・ノグチの提案による。ノグチはスペース・フレームの上にフラー・ドームをのせるべきとも主張したという。

山本は壁の石積みを「石がこそごと話し合っているよう」と評していた。和泉氏はこの壁に「石工の技術を残しておきたい」と考え、石には玄翁などの道具の跡が見られる。見る人が見れば「昔ながらの技とわかる」という。また、この前に住んでいた家は古い木造で掃除が大変だったが、「石はホースで水をかけて洗える」とも話す。

- 1 東側の外観。石垣という野面積みや乱積み手法で石を積み上げた
- 2・3 半世紀近くたつのに古さを感じさせない空間。長テーブルは香川産のケヤキの一枚板で、山本が「イズミ家」に使う木を調達した材木屋で見つけ、この空間に置いた。居間に立つ円柱の上部には、ノグチの代表作「黒い太陽」（1969）の制作時に割り買かれた黒い石がのる



# 瀬戸内海歴史民俗資料館

1973年

設計 | 山本忠司

## 地域主義の作品として評価された 山本の代表作

高松市街地から車で30分ほど、備讃瀬戸を一望できる五色台の山上に立つ。木造船や漁具をはじめ、瀬戸内地方の歴史・民俗・考古資料を収集・公開する資料館で、建物を設計するうえで海山の豊かな自然環境との調和がテーマとなった。

建物全体は8mを基準単位として各室をさまざまな大きさに分割し、地形を取り込みながら中庭を囲んで連ね、平屋だが7mの高低差をつなげている。外壁には整地の際に現場から発生した石を丹念に積み上げた。この造形は、設計中にイサム・ノグチや和泉正敏氏とともに訪れた「インド経営大学」(ルイス・カーン設計)の建設現場で、現地の土で焼いた煉瓦を職人が積み上げて建物をつくる光景に魅了されて生まれた。インドからの帰路、山本はそれまでの設計案を一転させ、実現案の原型となるスケッチを一夜で描き上げたという。

この建物は地域主義の作品として評価され、1974年度の日本建築学会賞(作品)に選ばれた。自治体に所属する建築技師の学会賞受賞は初めてのことだった。

- 1 屋上展望台から西側の各室の屋根を見る
- 2 アプローチから入り口付近を見る。瀬戸内海に浮かぶ女木島(めぎじま)の防風壁「オオテ」をイメージさせる大きな石壁のボリュームと、打ち放しコンクリートの小さなボリュームが、五色台の小丘を囲むように雁行・周回する。石壁の施工は和泉氏が担当した
- 3 各室はスキップフロアのように連なる。館内には計170段以上の階段を設けて地形になじませている
- 4 最も大きい第1展示室。面積の大小、床面の高低がそれぞれ異なる展示室は計10室あり、中庭を囲むように配置されている
- 5・6 順路表示として建物の内外に設置された、石造の指さしサイン。山本が四国遍路の道標をモチーフにデザインしたもの【写真:長井美晴】
- 7 大小の石がびっしりと積み上げられた展望台・民俗収蔵庫の外壁は、高さが最大7.5mに及ぶ。近づく、一つひとつの石の表情の違いに引き込まれる



1



2



3



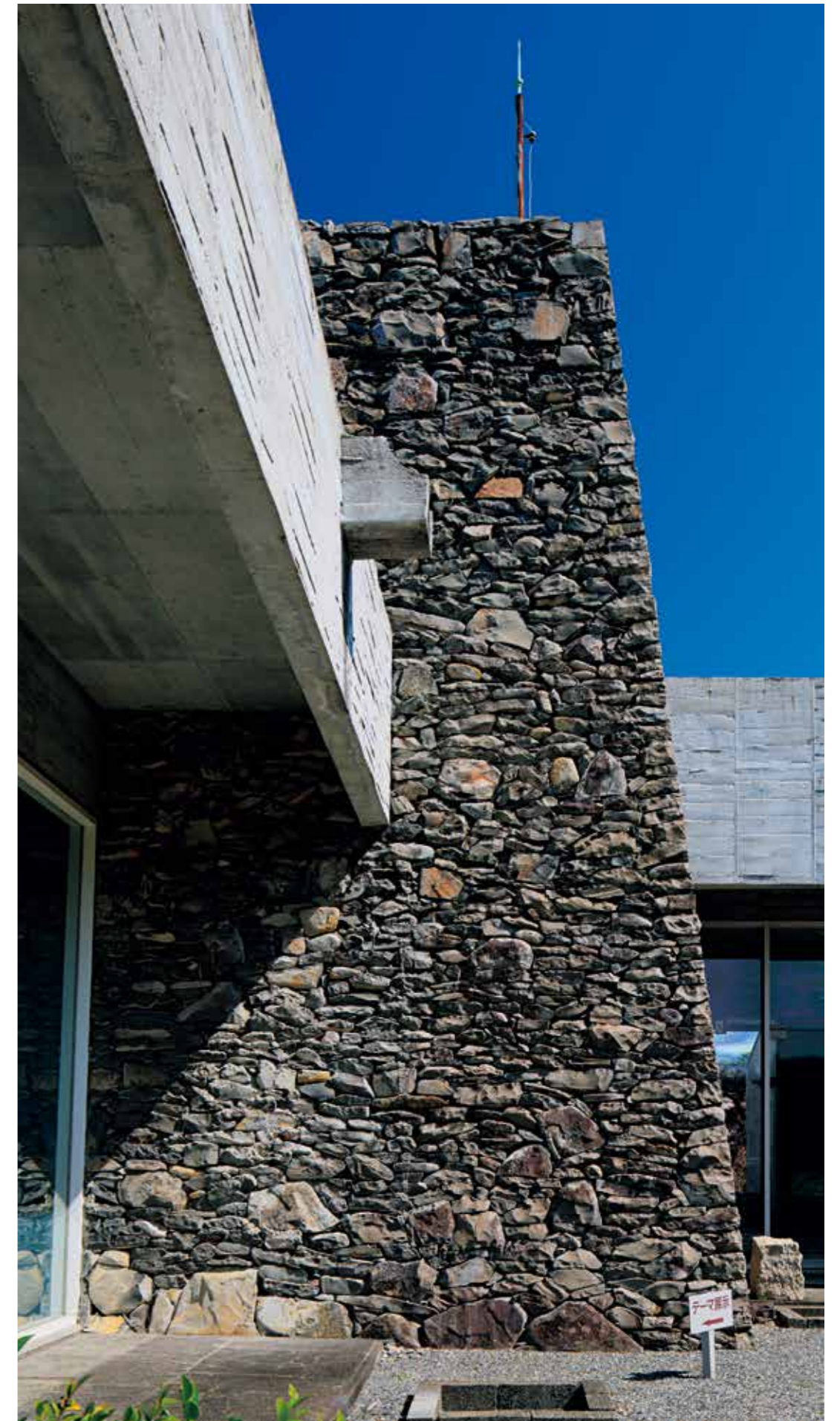
4



5



6



7



# ジョージ・ナカシマも称賛した 讃岐民具連と木工の技術

取材・文 | 磯 達雄  
写真 | 小松正樹

デザイン知事と呼ばれた金子正則の下、建築家の山本忠司が牽引して、高松では建築に石を用いた優れた環境デザインが数多く実現していった。しかし注目すべき動きはそれにとまらない。特に木工の分野では、地元の家具製作会社と米国の著名なデザイナー、ジョージ・ナカシマの組合せにより、優れた家具が生み出された。現在も続くその営みに接するため、高松市牟礼町にあるジョージ・ナカシマ記念館を訪れた。

デザイン知事と呼ばれた金子正則が育てたのは、建築と石工だけではない。さまざまな分野のデザインが1960年代の高松で急速に盛り上がりを見せていた。そのなかでも最も目立った動きを見せたのが木工だ。

金子知事とともにキーパーソンとなったのは、ここでも流政之だった。きっかけは雑誌『芸術新潮』が企画した「日本の建築ベスト10」という記事。第2位に選ばれた香川県庁舎を取材するために、若き美術家の流が香川県を訪れ、金子知事と面会したのである。香川県から世界に通用するデザインを生み出していこうとする知事の考え方に共鳴し、1963（昭和38）年、讃岐民具連を結成する。民具とは、一般の人々が日常で使う道具のこと。それを洗練されたデザインで製品化していこうと呼びかけに、地元の工芸作家やメーカーが集まった。山本忠司も含まれていた。

その中心的メンバーだったのが、木工の家具製作を手がけていた桜製作所の高松頭と永見眞一

だった。香川県庁舎や香川県文化会館の家具もいくつかが彼らの製作によるものだ。

讃岐民具連による表立った動きは、栗林公園の商工奨励館で行われた展覧会など、ごくわずしか記録に残っていない。讃岐民具連とは、どのような組織だったのか。永見眞一の後を継いで、桜製作所の社長を務める永見宏介氏に訊ねてみると、「料亭で酒を飲みながらわいわいやっていただけかもしれない。でもそこに流れていた空気が大事だったのだと思う」との答え。参加者は互いに刺激を受け、それぞれに腕を磨く。その広まりが地域全体のデザインを向上させていった、というわけだ。

## 讃岐民具連への共感を表して 「ミングレン」の名前で家具を発表

そうしたなかで、讃岐民具連に強力なメンバーが米国から加わる。ジョージ・ナカシマだ。ニューヨーク世界博覧会で石の壁画「ストーンクレイジー」を手がけ



3



4

るなどして名を上げていた流が、来日したナカシマを讃岐民具連のメンバーに会わせたとである。両親ともに日本人ながらナカシマは米国で生まれた家具デザイナーで、若いころには日本のアントニン・レーモンド建築事務所でも働いていたこともある。キャンチレバー（片持ち）の構造を採った「コノイドチェア」をはじめとして、彼の家具は多くの米国人に愛された。

ナカシマは地方に拠点を置いてデザインを追求する民具連の趣旨に共感の意を示すとともに、桜製作所が手がけた木工作品に接してその技術に感心する。そして自分がデザインした家具を桜製作所につくらせるようになる。1968（昭和43）年に東京・新宿の小田急百貨店で開催された「第1回ジョージ・ナカシマ展」では、「ミングレン」の名前を冠した椅子やテーブルが展示され、評判を呼んだ。

ジョージ・ナカシマと桜製作所の関係はその後も続き、家具のライセンス生産を行うようになる。そうした関係は、ナカシマが1990（平成2）年に没したあとも続いている。桜製作所では、オリジナルのデザインや中村好文、喜多俊之といった他の著名デザイナーによるものも手がけるが、現在もナカシマの家具を主要な製品として販売している。

## 高松を訪れた そうそうたる建築家やデザイナー そのサインで埋め尽くされた梁

2008（平成20）年には高松市牟礼町にある桜製作所の工場敷地内に、ジョージ・ナカシマ記念館がオーブ

ンした。ここではナカシマがデザインした歴代の名作家具を鑑賞することができる。「コノイドチェア」、「ラウンジアームチェア」、「麻の葉ランプ」といった代表作はもちろん、ナカシマがレーモンド事務所在籍中に担当した聖パウロカトリック教会の椅子もある。

そのなかの一部には座ってみることも可能だ。たとえば「コノイドチェア」は、2本しか脚がなく一見したところ危なげな構造なのだが、腰掛けてみれば非常に安定していて、しかもしっかりと座り心地であることが実感できる。同時に、シンプルな形と継手の強度を両立させる木工技術の高さにあらためて驚嘆させられる。

展示ではパネルを用いて、ナカシマの生涯についても解説。桜製作所のかかわりももちろん紹介している。また東京や米国から世界的に著名な建築家やデザイナーが高松を訪れ、高いレベルの作品をつくり上げてきた。その背景には、高松の幅広い分野におよぶ高い技術と意識をもった製作者集団があったことがわかる。そんな体験ができるミュージアムだ。

ジョージ・ナカシマ記念館を訪れたら絶対に見逃してはならない場所がある。喫茶コーナーの上に架かる木の梁だ。以前のショールームにあった梁を移設したもので、そこには桜製作所を訪れたそうそうたる建築・デザイン関係者の署名が残っている。「つくるものは変わっても、人々との出会いで育まれたデザインの精神は、これからも受け継がれていく」と永見社長。高松を訪れるなら、ぜひ立ち寄りたいたスポットだ。

- 1 ジョージ・ナカシマ記念館の展示室。ナカシマがデザインした家具が並んでいる
- 2 ジョージ・ナカシマ記念館の喫茶コーナーに架かる梁は、桜製作所の旧ショールームから移設されたもの。表面にジョージ・ナカシマ、流政之、猪熊弦一郎、イサム・ノグチといった高松ゆかりのデザイナー、芸術家のほか、著名な建築家や写真家らのサインがびっしりと書き込まれている
- 3 「コノイドチェア」。1960年にデザインされたジョージ・ナカシマの代表作。斜めに伸びる2本の脚で座面を支えるというデザインは画期的だった
- 4 「ラウンジアームチェア」。無垢の木が素材の魅力を生かした座り心地がゆったりとした座り心地をもたらす。肘掛けにはカップを置くこともできる



1



2

磯 達雄 いそ たつお  
建築ジャーナリスト/1963年埼玉県生まれ。1988年名古屋大学工学部建築学科卒業。1988-1999年日経アーキテクチャ編集部勤務。2002年-2020年3月フリックススタジオ共同主宰。2020年4月よりOffice Bungaを共同主宰。現在、桑沢デザイン研究所および武蔵野美術大学非常勤講師。

# 高松建築めぐり

## TAKAMATSU

### 参考

- ・上野時生編『建築家・随想集 瀬戸の海明り』香川県建築設計監理協会、1981
- ・香川県立ミュージアム「常設展示解説シート Vol.101」2019
- ・金子正則・浅田 孝・津田 正・矢野浩一郎 編著『地域社会の豊かさを求めて』総合労働研究所、1985
- ・高松市 公式ホームページ (https://www.city.takamatsu.kagawa.jp/index.html) 2020.4.15アクセス
- ・高松市歴史資料館「心を豊かにするデザイン：讃岐民具連とその時代」高松市歴史資料館、2016
- ・高松市歴史資料館「心を豊かにするデザイン：讃岐モダンへのあゆみ」高松市歴史資料館、2019
- ・文化庁 国指定文化財等データベース (https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index) 2020.4.15アクセス
- ・松隈洋監修『建築家・山本忠司：風土に根ざし、地域を育む建築を求めて』京都工芸繊維大学美術工芸資料館＋香川県立ミュージアム、2018

### おことわり

04-21ページの作品名称は文化財指定名称とし、ほかは原則として2020年5月時点の施設名称を使用しています。

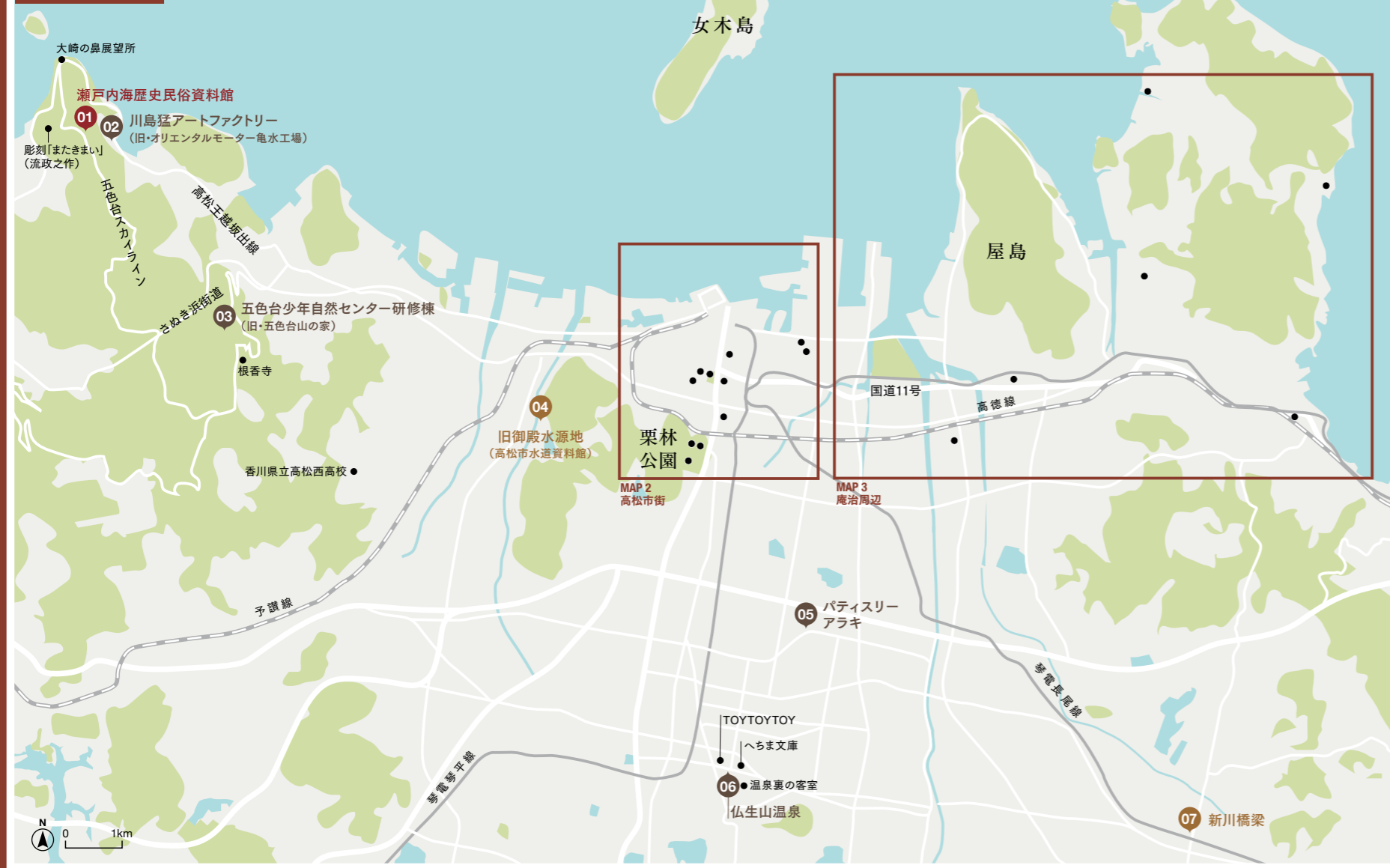
高松は近代建築の遺産が随所に見られる、香川建築モダニズムの中心地である。市街地を歩くだけで、次々と名作を巡ることができる。この建設の推進力になった、当時の知事・金子正則と県の建築技師・山本忠司がかかわる建物もいくつか残されている。

また港町でありながら、小山や台地が点在する独特の風景が広がるのが高松だ。花崗岩や火山岩が風化して生まれた景色で、石材が豊富なまちなのだ。たとえば庵治石は有名で、墓石や石碑の材料として重宝されている。石は戦後、アーティストや建築家を呼び寄せることになった。彫刻家の流政之、イサム・ノグチがアトリエを構え、地元石材店が建築家と協働を始める。今回注目する山本忠司の主な作品も石がメインテーマだ。

香川モダニズムの潮流は建築にとどまらずさまざまな分野のものづくりで広がり、職人、アーティスト、デザイナーらが一丸となったデザイン運動も展開。その足跡をあちこちでたどることができる。近年は瀬戸内国際芸術祭の開催地としても人を集めている。

写真 | 小松正樹 (特記以外)

### MAP 1 | 高松市広域



### MAP 3 | 庵治周辺



### MAP 2 | 高松市街



瀬戸内海歴史民俗資料館

設計 | 山本忠司  
竣工 | 1973年  
高松市亀水町1412-2

川島猛アートファクトリー

(旧・オリエンタルモーター亀水工場)  
改修設計 | TAS建築事務所  
設計 | グッドデザインスタジオ、  
長尾勝彦+デザインオフィス  
竣工 | 1969年4月  
改修 | 2016年-  
高松市亀水町1411

1963年に渡米後、ニューヨークを拠点に活動を続けてきた芸術家・川島猛の故郷・香川での新たな制作拠点であり作品の収蔵・展示の場。海を望む斜面に立つ鉄筋コンクリート造6階建ての建物は元工場で、製品の組立てラインとして使われていた6階を必要最小の改修を施しギャラリーとして作品を展示。2019年には、美術館として正式オープン。6階の搬入口を鉄石と空き缶をプレスしたインゴットを用いて整備し美術館の入り口にしたほか、展示する作品に合わせて照度調整が可能な壁面照明の設置など、川島の活動に賛同する仲間による改修が続いている



五色台少年自然センター研修棟

(旧・五色台の家)  
設計 | 浅田孝+環境開発センター  
意匠デザイン | 栗津潔デザイン研究教室  
竣工 | 1965年  
改修 | 2019年  
高松市生島町423

丹下健三の右腕として、また日本初のプレファブ建築「南極観測隊昭和基地」の設計でも知られる都市計画家・浅田孝。数々の都市計画にかかわった浅田が終世取り組んだのが、香川の五色台開発計画であり、この施設が計画の先鞭となった。景観と眺望を強く意識したという屋根には、時を経るごとに落ち着いた色調になるコルテン鋼を採用。大規模改修によって内部は姿を変えたが、外観は当時の姿のまま。浅田と親交のあったイサム・ノグチが寄贈した遊具「オクテラ」も当時のまま残る



旧御殿水源地 (高松市水道資料館)

設計 | 不詳  
竣工 | 1915年(集水渠渠東方人孔)、  
1917年(事務所・倉庫)、1918年(唧筒場)  
高松市鶴市町1360



日本で40番目の近代水道として給水を開始した浄水場。竣工時期が不明なものもあるが、キングポストの洋小屋組でつくられたポンプ場「唧筒場(そくとうじょう)」や装飾的な破風をもつ「事務所」など6つの建物が、ほぼ建設当時の姿のまま残る。現在、唧筒場は水道資料館となっており、年間を通じて降水量が少なく、大河川のない高松市における水道の歴史を知ることができる。唧筒場、事務所など計6件が国登録有形文化財



パティスリーアラキ

設計 | 長田慶太建築要素  
竣工 | 2011年  
高松市林町2547-5

高松を拠点に設計活動を行う長田慶太の設計による洋菓子店。幹線道路から1本はずれた土手沿いに立ち、計画当時、周辺には水田が広がっていたという。そのまちとの心的、身体的な距離感をもとに、「風景のなかにあつては小さな山、人にとっては小屋のような存在」として、大屋根を杉皮で覆った特徴的な外観を計画した。手前が売り場棟、奥に厨房棟。屋根は板金で止水しており、「杉皮が保水層として働くことを狙った」という



仏生山温泉

設計 | 設計事務所岡昇平  
竣工 | 2005年  
高松市仏生山町乙114-5



設計者の父が掘り当て、設計者自身が運営する温泉入浴施設。中庭を中心に回遊する露天風呂が、多様な空間体験を織込んだリラクゼーション効果を生んでいる。物販や休憩エリアなどを仕切らず連続させた大ホールも特徴。廉価な素材でも品良く使う手法が随所に見られる。別棟の客室があり、宿泊可能。この温泉を中心に、カフェ併設の家具・雑貨も販売する古書店など、いくつかの拠点を同設計者が運営している。他の建物も必見だ。詳細は『LIXIL eye』no.15、36ページ、「新世代・事務所訪問03：設計事務所岡昇平」参照 [写真：永井香奈]



新川橋梁

設計 | 不詳  
竣工 | 1911年  
木田郡三木町  
鹿伏

高松の鉄道網は、高松港を中心に広がってきた。そのひとつ、長尾線の平木駅と学園通り駅の間にある鉄道橋。当初は木橋で、大正期後半ごろに鉄桁に架け替えられたが、木橋時代の支保工の痕跡など建設当初の姿が良好に残る。下流側が階段状となっているのは、この段々部分に石を積み増し、将来の複線化時の増築に対応するため。また、水や漂流物を受け流す流線形の輪郭など、全国的にも稀な特徴をもつ。土木学会選奨土木遺産



四国村

設計 | 安藤忠雄(四国村ギャラリー)、流政之(染が滝)ほか  
竣工 | 2002年(四国村ギャラリー)、1977年(染が滝)  
高松市屋島中町91

源平の古戦場として知られ、南北に長い台地状の地形が特徴の「屋島」。四国村は、この屋島の南山麓に設けられた、四国各地から古民家を移築・復元し公開している野外博物館。四国の地で生まれ、育まれた建築文化を体験できる。村内の散策路「ながれ坂」は、庵治の石切り場から切り出された大きな花崗岩の表情が美しい。「染が滝」(写真右)とともに、美術家・流政之の設計。多種多様な古民家に加え、四季折々に姿を変える豊かな自然、高台に立つギャラリー(写真左)も見どころ



NAGARE STUDIO 流政之美術館

設計 | 流政之  
竣工 | 1966-2019年  
高松市庵治町3183-1



美術家・流政之が、晩年まで暮らした住居兼制作拠点を公開した施設。流は、国内外の彫刻作品だけでなくとどまらず、「石匠塾」「讀岐民具連」など香川県の文化活動にも大きな影響を与えた。流財団の香美代表理事は「Please touch」はこの場所独自の鑑賞のコンセプト。手で作品に触れ、感じていただきたい。それが流の想いです」と言う。屋内外に並ぶ作品に加え、焼き損ねた煉瓦を集め、増改築を繰り返し現在の姿となった建物自体も作品のひとつだ。島々を見渡す雄大な景色を気に入り、この地にスタジオを構えた流。いま海を望む特等席には、代表作「サキモリ」が静かに佇んでいる



イサム家、イサム・ノグチアトリエ作業蔵、展示蔵(イサム・ノグチ庭園美術館内)

設計協力 | 山本忠司(イサム家、作業蔵、展示蔵)  
竣工 | 1969年(イサム家、作業蔵)、1982年(展示蔵)  
高松市牟礼町牟礼3519(イサム・ノグチ庭園美術館内)

高松市庵治支所(旧・庵治町役場)

設計 | 村上徹建築設計事務所  
竣工 | 1996年  
高松市庵治町6393-5  
海岸近くに立つ役場庁舎。潮風を遮るため、中央の広場を事務棟が囲む構成をとり、道路との間に境界を設けないことで人が立ち寄りやすい開放的な雰囲気をつくり出している。一方、「町民が集まり、最も目にしやすい場所」(『日経アーキテクチュア』1996年6月17日号)である広場には、町民に開放するギャラリーと議場が入る逆円錐のガラス張りの中央棟を配し、その足元に町の象徴「庵治石」のベンチを置いて、広場の象徴性を高めている。現在は、市町村合併により支所として使用



13 ジョージ ナカシマ記念館  
 設計 | 桜製作所  
 竣工 | 2008年  
 高松市牟礼町大町1132-1

15 香川県工奨励館  
 設計 | 伊藤平左衛門  
 竣工 | 1899年  
 高松市栗林町1-20-16  
 (栗林公園内)



16 栗林公園讃岐民芸館  
 改修設計 | 山本忠司  
 改修 | 1965年(古民芸館)、1967年(新民芸館)、1969年(家具館)、1970年(瓦館)  
 高松市栗林町1-20-16(栗林公園内)  
 4棟からなる施設群。工奨励館の2つの蔵を改修して1つの建物にまとめあげた古民芸館(写真下右)にはじまり、公園の観光事務所を新民芸館に、物置を家具館へ、レストハウスを瓦館(写真右・下左)へと改修して現在の姿に。いずれも山本の設計だが、時代や構造が異なる建築を、石や瓦、木などの素材を用いてまとめあげている。瓦館の山本がデザインした椅子の座面(瓦)は、「喫茶城の眼」ではランプシェードに使われている。※新民芸館は、2020年秋に老朽化のため取り壊し予定



14 さくばつてい 掬月亭  
 設計 | 不詳  
 竣工 | 江戸時代初期  
 高松市栗林町1-20-16(栗林公園内)  
 国の特別名勝「栗林公園」。その園内にある歴代の高松藩主が使用した数寄屋造りの茶室。どこから見ても正面として見ることができる四方正面造りで、中に入ると視界を遮る戸袋がないことに気づく。これは美しい庭や池を効果的に鑑賞できるように、戸袋を1つに集約しているためだ。128枚もの雨戸が、建物の四隅に設けた「戸廻し棒」を支点に90度方向転換し、すると収まっていく。朝、夕には、雨戸を開閉する軽快な音が響く。村野藤吾が自作に取り入れた、床の間や天井の意匠も見どころ



17 まいまい亭  
 設計 | 山本忠司  
 竣工 | 1978年  
 高松市東田町18-5  
 伝統的な讃岐料理を提供する店。かねてから金子元知事や山本らと親交が厚く、新旧店舗とも山本の設計。施工した宮大工が「偉い船頭が多い」とこぼしたというが、多くの文化人が店に集った。建築史家の神代雄一郎もその一人。店名は流政之の命名で、芸術家の貴重な作品が多く残る。数年前に、流の助言で壁の一部を黄色に塗り直したほか、格天井を取り外して間仕切りにしつらえ直した。「流先生から学んだことを伝えられれば」と、指南を受け買い付けた骨董も販売。香川の芸術・文化を色濃く感じる場だ



18 香川県庁舎(本館、東館)  
 設計 | 丹下健三計画研究室(東館)、丹下健三+都市・建築設計研究所(本館)  
 改修設計(東館) | 松田平田設計(基本設計)、大林組一級建築士事務所(実施設計)  
 竣工 | 1958年(東館)、2000年(本館)  
 改修 | 2019年(東館)  
 高松市番町4-1-10  
 戦後、焼け野原となった香川の復興を象徴する庁舎。山本忠司もその実現に奔走し、木工や石材加工など地元関係者にも大きな刺激を与えた建築だ。ここで採用された「打ち放しコンクリート」「ピロティ」「センターコア方式の採用」「高層棟と低層棟の組合せ」は、その後の全国自治体庁舎のモデルとなった。丹下研究室による家具や庭、猪熊弦一郎による陶板壁画など、見どころは尽きない。大規模な耐震改修では、細部にわたってその文化的価値の保存が図られた。第1回BCS賞受賞、日本におけるDOCOMOMO近代建築20選



21 百十四銀行本店  
 設計 | 日建設計工務株式会社  
 改修設計 | 日建設計  
 竣工 | 1966年  
 改修 | 2011年  
 高松市亀井町5-1  
 竣工当時、西日本一の高さを誇った、緑青仕上げのブロンズの外壁が目引く銀行建築。水平に延びる低層と高層の構成も特徴で、高松のランドマークとして親しまれてきた。設計は、日建設計工務(現・日建設計)大阪本社の設計監理チームを率い、「建築は、社会的資産であるべし」と語った葉袋公明(1926-2007)。竣工から50年以上たつが、耐震補強や南北面をダブルスキン化し省エネルギー性能を高めるなどして、大切に使用れつづけている。内装と駐車場の壁面緑化は、流政之の監修。日本におけるDOCOMOMO選、BCS賞受賞、JIA25年賞受賞



19 香川県文化会館  
 設計 | 大江 宏  
 竣工 | 1965年  
 高松市番町1-10-39  
 鉄筋コンクリート造の構造体に対し、総ヒノキの芸能ホールや茶室など異なる表現が併存する。大江が提唱した「混在併存」の原点ともいえる建築。成形合板の技術を用いた椅子、瓦の灰皿、のちに讃岐民芸連の製品に加えられた行灯なども大江自らのデザイン。椅子はいまも大切に使われている。現在は香川県立ミュージアムの分館と、上層階は香川県漆芸研究所として使用されており、入り口正面に置かれた流政之の彫刻「おいでませ」が出迎える



20 アイバル香川 / 香川国際交流会館(旧・香川県立図書館)  
 設計 | 芦原義信建築設計研究所  
 改修設計 | 山岸建築設計事務所  
 竣工 | 1963年  
 改修 | 1995年  
 高松市番町1-11-63  
 建築当時、中央にコアとして書庫をおき、その周囲に閲覧室や事務室をスキップフロア状に計画した建築。「香川県はとにかく丹下さん以来、非常に建築に理解があって、むしろいいものをやらなくちゃいかん」ということのほうが条件(「新建築」1963年4月号)だったと芦原は語る。美術家・流政之も「石かぐら」、「雨ごいジシ」といった作品を手がけるなど外構計画に深くかかわった。改修・用途変更したが外観はほぼ当時のまま。かつて東の庭にあった池は植栽に変わっている



22 喫茶「城の眼」  
 設計 | 山本忠司  
 竣工 | 1962年  
 高松市紺屋町2-4  
 23 香川県立武道館  
 設計 | 山本忠司  
 竣工 | 1966年  
 高松市福岡町1-5-5

24 香川県立体育館  
 設計 | 丹下健三  
 十都市・建築設計研究所  
 竣工 | 1964年  
 高松市福岡町2-18-26  
 巨大な和船を連想させる独特のフォルム。客席のカーブが外観の反りに現われた形だ。反りの裏にはリブのついたワッフルスラブが見える。舷側のようなRC曲面が、高張力鋼を引く吊り屋根構造で、国立代々木競技場と同時に設計された吊り構造。浮き上がる船体を4本の柱が支えている様は、動物のようでもある。耐震改修が難しく2014年に閉館したが、その存在感は当時のままだ。※現在は外観のみ見学可能[写真:石田篤]

